アーティスト・サポート事業 enoco［study？］#2　入選アーティスト決定！

若手アーティストと協働しながら「アートの可能性」や「社会や他者に対してひらいていくこと」について［ study? ］する「アーティスト・サポート事業 enoco［ study?］」。
第 2 回目となる今年度は、2014 年 6 月 1 日（日）～8 月 31 日（日）の間に募集を行い、審査員による厳正な審査の結果、堀川すなおさんを入選アーティストとして決定いたしました。
ご応募いただいた皆様には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。
入選アーティストである堀川すなおさんには 2013 年 10～12 月の 3 ヶ月間、enoco を拠点とした制作活動を行っていただきます（制作期間中、1 回以上のワークショップとオープンアトリエを実施します）。また 1 月には enoco 展示室にて展覧会を開催する予定です。
日程などの詳細・プロジェクトの進捗は、ホームページに随時掲載していきます。今後の展開にご期待ください。

<u>アーティスト・サポート事業 enoco［study？］#2　審査結果について</u>

＜入選アーティスト＞

堀川すなお（ほりかわ・すなお）

＜プラン内容＞

「目の前にある　その　もの本来の姿はなにか？」
公の制作場所やワークショップを通じて多くの人と出会い、人はものをどのように見ているか、ということを探り考えたいです。

＜企画内容について＞

目の前にある もの その本来の姿を探るため、制作をしています。

　ものの名前を聞いたとき、私たちの頭の中では容易にその形をイメージすることができます。その共通のイメージによって私達はコミュニケーションを図っています。
　しかし、実際にそのものをあらゆる角度、距離から見てみると、今まで気づかなかった多くの部分が見えてきました。

私の制作方法は、ひとつのものを数ヶ月間かけてじっくりと見て、描きます。そして目の前にあるもの、その本来の姿は一体何か、を多くの視点から描いたドローイングを見せることで問うています。

しかしふと思ったことは、一つのものを私一人の見方で見て描くことは、その結果見えるのは私のものの見方だけになってしまうのではないかということです。

私は enoco[study?]で、公の制作場所やワークショップを通じて多くの人と出会い、人はものをどのように見ているか、ということを探り考えたいです。

具体的には、出会った人に一つのモチーフを決め、そのモチーフをじっくりと見てドローイングを描いてもらいます。できるだけ複数描いてもらいます。その理由は、ある人を見ていた時に、２、３枚目はものに対してすでに知っているイメージを描いていたのですが、既存のイメージを描ききった２、３枚目以降、目の前にある対象と対峙し描いていたからです。対象と対峙することで見えてくるものを通して、私の制作の課題としている、目の前にあるもの、その本来の姿はなにか、ということを考えたいです。

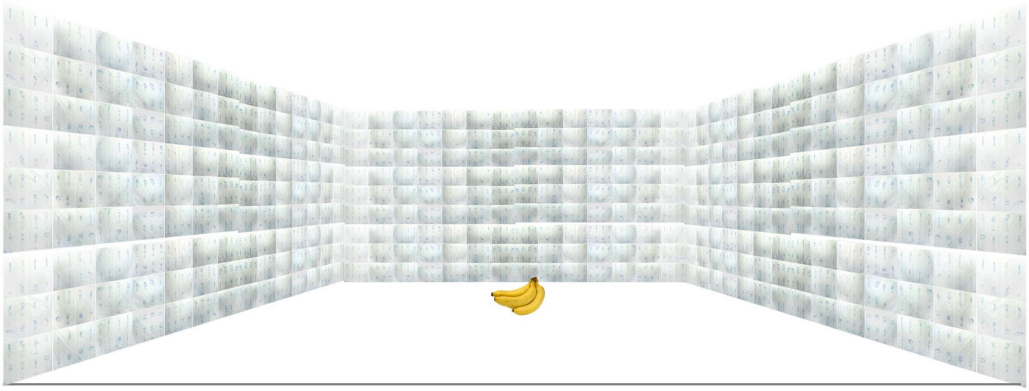
そして、一つのものに対して多くの人がじっくりと見たドローイングを展示することで、私達が共通に持っていたイメージとは何か、を考えるきっかけを作りたいです。

そこから私自身、ものの本来の姿をより広い見方で捉えることができるように学びたいです。

＜制作・展示プロセス＞

モチーフの決定
↓
ドローイングのワークショップを実施
↓
考察・まとめ
↓
（ワークショップからの流れを複数回くりかえす）
（※途中、中間レビューを実施）
↓
展示

＜展示イメージ＞



タイトル**「バナナ」**

　例えば、バナナをモチーフに選んだ場合。
色々な方に描いて頂いたバナナについてのドローイング、
そして、私がそのドローイングを見て考察したことを壁に展示し、
「目の前にある もの その本来の姿はなにか？」を問いかけます。

＜プロフィール＞

堀川 すなお

http://sunaohorikawa.com/

略歴

1986 年　東大阪生まれ

2008 年　クーパーユニオン芸術大学（ニューヨーク）交換留学生

2010 年　京都精華大学　芸術学部造形学科洋画専攻　卒業

2012 年　京都市立芸術大学美術研究科絵画専攻油画分野　修了

個展

2013　クオテリオム 87 堀川すなお/水戸芸術館現代美術ギャラリー第 9 室、茨城

2010　descriptive geometries/Kodama Gallery、京都

グループ展

2013　科学のあとに詩をかくこと/京都精華大学 7 号館 7-23 ギャラリー、京都

2012　VOCA 展―新しい平面の作家たち 2012/上野の森美術館、東京

アートアワードトーキョー丸の内 2012/行幸地下ギャラリー、東京

視域/京都精華大学 7 号館 7-23 ギャラリー、京都

2011　G tokyo 2011/森アーツセンターギャラリー、東京

作品中！/ギャラリー16、京都

制作展/京都市美術館、京都

ignore your perspective/Kodama Gallery、東京

2010　蓄積による絵画/ギャラリー16、京都

DON'T FREEZE/くずはアートギャラリー、大阪

2008　NEW WORK/グレートホールギャラリー、ニューヨーク

POP exhibition/ギャラリーRAKU でのサテライト．バー超能力、京都

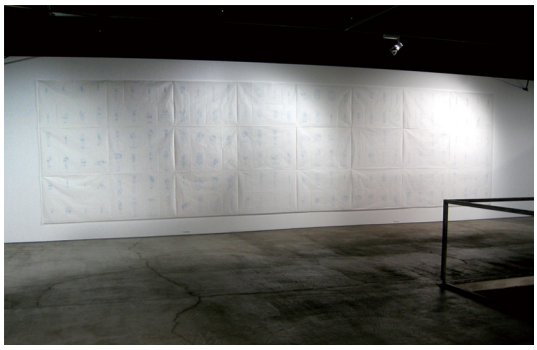
opening no selection/バー超能力、京都

Method for seeing distant place 展/ART SPACE 其の延長、京都

パブリックコレクション

京都銀行、JAPIGOZZI Collection（イタリア）、STARSBURGO

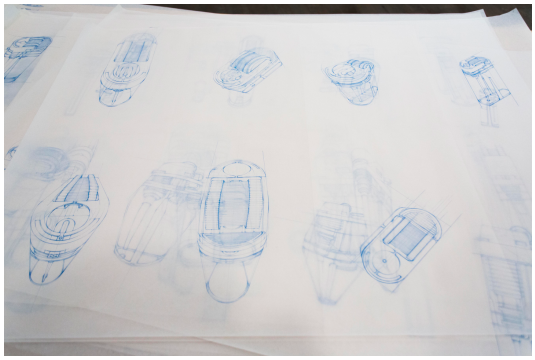
過去作品



lighter no.1~192 #2 (2010)

h240cm×w780cm

色鉛筆、あい紙



lighter no.1~192 #2（部分）（2010）
色鉛筆、あい紙

＜審査方法について＞
提出頂いた作品プラン、ポートフォリオなどをもとに、「プランのオリジナリティ」「制作プロセスの計画性」「今後の発展性」等 7 項目の審査基準に基づき、80 点満点の得点制で審査を実施しました。
各作品に関するディスカッションを行った後、各自審査基準に基づき点数にて評価を行い、その合算で得点数の多かったアーティストを絞り、
本事業で取り組む意義があるか/本事業趣旨に合致しているかを議論し、入選者 1 名を決定しました。

＜審査員コメント＞
平田剛志（京都国立近代美術館研究補佐員、つくるビルアドバイザー）
　enoco でなにを「study」するか。応募者に問われていたのは、study することの可能性であり、それをオープンにする姿勢でした。
　今回の公募では、新しさや地域性に魅力あるプランもありましたが、堀川すなおさんは今回の応募者のなかで唯一問いを立て、なにを「study」するかが明確でした。問いである「目の前にある もの その本来の姿はなにか？」は、言い回しこそ違えど美術史においてつねに問われ続ける問いで新しさはありません。しかし、作家自身のこれまでの制作課題と接続していること、他者との交流がきっかけで生まれた問いであることに書類対策ではない日頃の「study」が表れていました。応募資料ではプロセスの具体的な記述には欠けましたが、あらためてこの問いを共有したいと思います。堀川さんがこの問いをいかに他者や社会と共有、協働、考察していくか、安易な答えを求めない問いの深化・実践に期待しています。

宮本典子（アートマネジメント・コンサルティング office N 代表／ART OSAKA 事務局）

応募者プランの傾向として、募集要項に書かれている「社会に対してひらいていくこと」「study=能動的に勉強する・検討する・観察する・練習する」あるいは「社会や他者と関わることに対する姿勢」という課題を、素直にプランの中に落とし込んでいるものが多かったように思います。具体的には都市をサーヴェイする案や、ワークショップを介して他者と関わろうとする案です。今回選んだ堀川すなおさんのプランは、その点では一見、個人的な関心や問題意識に基づいた制作プランと言えますが、目の前で見ているものを一度疑い、見て知っていることは何かを、独自の表現技法をもって追求している真摯な姿勢が伝わってきました。直接的に分かりやすく社会と繋がっている案ではありませんが、美術表現を通して人々の意識を変えようとする骨太さと、選ぶモチーフによって、歴史的にも、工学的にも、自然美学的にも様々に掘り下げられる豊かさがあると感じ、将来の発展性を感じました。

そしてこのような作品制作では、どうしても内に閉じてしまう傾向がありますが、本支援事業の特色であるワークショップで他者を介在させて、少しでも多くの新しい視点や気付きを積むことが今後の作家活動の糧になると期待し、選出致しました。

峯恵子（江之子島文化芸術創造センター企画部門）

「制作プロセスを他者や社会に対してひらいていくこと」を条件のひとつとして掲げたこのプログラムにおいて、「社会」や「他者」というものに対する各アーティストごとの認識は本当にさまざまで、審査員のお二人との議論を重ねる中でもたくさんの発見がありました。大阪あるいは enoco の周辺地域の中で「社会」や「他者」と関わるプランを考えたアーティストが多かった中、堀川すなおさんはより普遍的なテーマ設定の作品を提示しました。これまで一貫して繊細で精密な平面作品を制作してきた彼女ですが、「ものを見る」という普遍的な行為の中に他者を介在させることが作品にどのような影響をもたらすのか、また作品が他者の「ものの見方」をどのように変えていくのか。これから約３ヶ月半にわたる彼女の［study］を、全力でサポートさせていただければと思います。